

無料になった予防接種について

国では平成 22 年度補正予算で子宮頸がんなど 3 種のワクチンを無料接種することを決めました。平成 22 年度、23 年度分が盛り込まれています。将来的には定期接種化に向けて法改正される予定です。以下に、ヒブ（H i b）ワクチン、小児用肺炎球菌ワクチンについて説明します。



ヒブ（H i b）ワクチン

～ 予防できる病気 ～

このインフルエンザ菌(*Haemophilus influenzae*)b 型がのどから入って、脳を包む髄膜（ずいまく）、のどの奥の喉頭蓋（こうとうがい）、肺などに炎症を起こします。重症化して後遺症を残したり、死亡したりします。日本では毎年約千人が細菌性髄膜炎になっていますが、60%がこの菌によるものといわれています。（インフルエンザウイルスとは別です。）

～ 接種する時期 ～

生後 2 ヶ月以上 7 ヶ月未満で開始し、通常、4～8 週間の間隔で 3 回、3 回目の接種後おおむね 1 年の間隔をおいて 1 回と合計 4 回接種。3 種混合ワクチン、小児用肺炎球菌ワクチンとの同時接種も可能です。

～ 副反応 ～

ワクチンを接種した後に、接種した部位が赤くなったり、はれ、不機嫌などがあり、そのほか発熱が数%程度報告されています。これらは一時的で数日以内には消失します。

小児用肺炎球菌ワクチン

～ 予防できる病気 ～

風邪やインフルエンザにかかった後に、肺炎をおこしたり中耳炎にかかりやすくなることはあります。このような時、肺炎球菌が悪さをしていることがあります。肺炎球菌は、耳で感染症をおこすと「中耳炎」、肺に入りこんで「肺炎」、血の中に入りこんで「菌血症」、脳や脊髄をおおっている髄膜の中に入りこんで「細菌性髄膜炎」を発症します。これらの病気は、もちろんほかの細菌やウイルスが原因でおこることもありますが、肺炎球菌が主要原因であることがほとんどで、菌血症では 80%（1 番目）、肺炎の場合は 30%（1 番目）、細菌性髄膜炎では 20-30%（2 番目）、細菌性の中耳炎の場合は 30%（2 番目）が肺炎球菌が原因となっています。小さなお子さんは肺炎球菌に対して抵抗力は持っていません。小児用肺炎球菌ワクチンを接種すると抵抗力ができるようになり、一番この病気にかかりやすい年齢の間、肺炎球菌からお子さんを守ってあげることができるのです。現在、世界の約 100 か国で接種され、2000 年から定期接種にしているアメリカでは肺炎球菌による重い感染症が 98%減りました。

～ 接種する時期 ～

生後 2 ヶ月以上から 9 歳以下まで接種できます。肺炎球菌による髄膜炎は約半数が 0 歳代でかかり、それ以降は年齢とともに少なくなりますが、5 歳くらいまでは危険年齢です。2 ヶ月になったらなるべく早く接種しましょう。（2 ヶ月以上 7 ヶ月未満で開始し、27 日間以上の間隔で 3 回接種。追加免疫は通常、生後 12～15 ヶ月に 1 回接種の合計 4 回接種。）

～ 副反応 ～

ワクチンを接種した後に、発熱や接種部分のはれなどの副反応が起こる頻度は、ほかのワクチンと同じ程度です。